

尻別文学歴史の会だより

蘭越町ホームページ版 : 10月号 : (平成29年10月1日/隔月発行)

花一会図書館(地域資料委員会) 編集 / 尻別文学歴史の会 協力

電話・メールアドレス

0136(57)6085(FAX 兼用)

hanaichie@voice.ocn.ne.jp

磯谷郡蘭越町蘭越町880-9

蘭越町コミュニティプラザ花一会

文：行方 洋子(尻別文学歴史の会)

蘭越人物往来

第四回 目名農場の平田敬信 (三)

明治33年 平田は、45歳で目名農場にやってきた。農場長として月給40円、内地への旅費も5か月で150円支給されるという厚遇であった。農場の状況は、定住小作41戸で、畑地はわずか40町歩ほどしかできてなく、あとはうっそうとした森が目名川に沿った丘陵地帯に広がっていた。明治32年の分村以降、本目名には、戸長役場が置かれ、商店数軒、旅人宿、巡査駐在所それに医院、寺社、尻別学校の分校まで備えた市街地が作られていた。農場事務所は、清水にあり比較的本目名に近いが、農場は目名川沿いに2里にわたって延び、総反別千八町歩余で、地味肥沃な河畔低地と劣等な丘陵からなっていた。

小作人を集めることから取り掛かった。目名農場の前任者の川村は、御成・初田にすでに移住していた田縁又右工門ら4戸を誘致し、主に石川県から小作人を募集した。「植民状況報文」(明治32年)によると小作法は、鍬下3年を与え、小屋掛け料として1戸8円、開墾料として1反歩1円を給す、とある。平田は、小作人を募集するのに、例えば明治36年2月の契約書では、富山県在住の北海道移民協会会長 川口慶吉に募集を依頼して、業務委託契約を交わしている。募集する小作人の戸数、募集期限のほか、旅費、小作料、など目名農場の基準を踏襲した条件を記している。小作人は富山からやってきて寿都・磯谷に上陸して後は、本目名(名駒)まで寿都街道をゆくか、尻別川を上って目名川と合流する辺りの船着き場から徒歩で入った。上記の場合は、伏木港から寿都・磯谷に来るまで旅費は一戸につき20円支払われた。農場に到着後、小屋を作るにも、木を伐ることから始める。のこぎり、山刀など一通りの大工道具で直径1~2尺もの大木を1反当り30~40本伐木したという。伐らずとも皮をはぐだけで枯れる木は、皮をはぎ、幹はそのままに枝だけをはらう方法もとられた。笹藪は5月~6月に火を入れ焼いた。とにかく、早く畑起こしにこぎつきたいので、できれば早春に入地し、伐木しながら笹焼きもして、すぐ蒔き付け(けずりおこし・すじおこし・つぼおこし)をすることが望まれた。それでも「移住の初年にありて、8、9月ごろまで開墾地より収穫すること能わず」(北海道移住のしおり)なのでその年の食糧費(玄米・雑穀・菜料)は支給された。

そうこうしている間に、農場を横断する形で鉄道の開削工事開始の運びとなった。明治36年8月北海道鉄道株式会社から農場内賀老中央線路用地として、復員6間、長さ1130間の

土地の寄付要請が来た。平田は、その土地（いまだ貸付地なので）を、鉄道に寄付することを承諾する意図をもって、政府に返還する旨を北海道鉄道社長の北垣国道に書き送った。9月には、同じく賀老に停車場設置用地 12827 坪の寄付要請があり、承諾した。その2日後、今度は農場から、北鉄に対して、駅の貨物取扱業務や駅構内において茶店・弁当・煙草・菓子・マッチなどの販売の許可を求めた。当時、平田は南尻別村の総代人でもあり、村全体の鉄道敷設に伴う付帯工事（里道踏切・架橋・川溝付替・開暗渠等）についても、戸長らと共に全面協力の意を伝えている。平田の、京都府属時代に北垣国道は京都府知事であった。今、北垣は、北海道鉄道株式会社の取締役社長で、平田は農場主代理として対峙している。時も所も遠く離れたこの奇遇を平田は、どのような感慨をもったのだろうか。

この年、平田は、丹後国与謝郡石川村の白須重右衛門と共同で目名農場に隣接する貝殻沢未開地約 20 万坪（畑地は 16 万坪余）の貸下げを出願して、6 月に許可された。平田は、目名農場の監督というだけでなく、平田農場の所有者兼監督となった（明治 41 年 3 月全地無償付与）。

鉄道工事が始まると、相生 2・3 の国道沿いにみそ・醤油・日用雑貨などを売る店、木賃宿、茶店などが立ち並びにぎわうようになった。明治 37 年 10 月「磯谷駅」（2 年後目名駅と改称）ができるが、その前から駅予定地周辺に飯場・商店が、新たに、または国道から移転して開業した。



「平田翁頌功碑記念」より転載

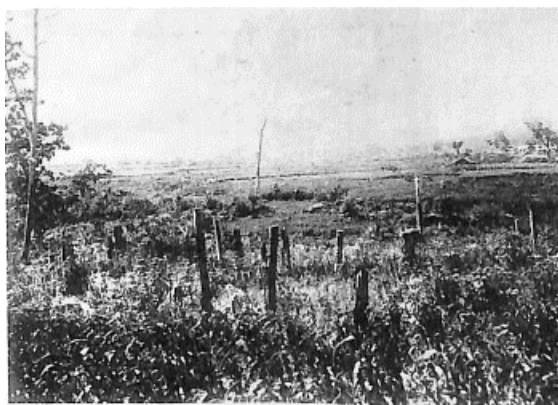
駅周辺の市街は、私設市街地と呼ばれ、その後発展し、明治 44 年までに約 50 の建物が建

った。一棟当たりの広さは、20 坪から 100 坪で、旅人宿 3、料理屋 1、飲食店 3、魚商 3、菓子商 1、米酒雑貨店 5、木挽き 10、大工 3、柁屋 1、石工 1、土工 2、鍛冶工 2、湯屋 1、理髪店 1、運送業 3、労働人夫 50（建物の棟数不明）農会建設の共同殺蛹乾繭器場 1、地方費森林保護区員駐在所 1、巡查駐在所 1、ができた（「目名駅及びその付近概況」明治 45 年 1 月）。

一方、駅から西へ 90 間隔でたところに公設市街地が区画された。「市街地の地勢は、低い丘陵に属し、停車場より通じる道路を本通りとし、原野区画の 6 号線に当たり、道幅 10 間とす。本通りの左右に並行して南北各々 1 条 2 条を置きその幅 8 間とし、更に各条の間に幅 6 間の小路を設く。又、本通りと交差して 1 丁目より 5 丁目まで設け、その道幅各 8 間とす」（殖民広報 明治 38 年）。1 区画は、間口 6 間、奥行き 25 間の 150 坪で、当初 244 区画、期限内に住宅を建てると 150 坪が付与されるということであったが、願書受付が始まると応募がわずかに 5 日間で区画数を超え、受付中止となった。（町史）

そして明治 39 年ころから家屋の新築が始まったが、入居する人は少なく、そのうち明治 40 年の函館大火が起きて木材の価格が高騰した折に、いったん建てた新築家屋を解体して函館に送るようなこともあり、上記の概況によると、その後あまり発展することはなく、戸数 30 余戸、米酒雑貨商 1、村社 1、寺院 2、郵便局、尋常小学校、森林保護区員駐在所であると農家である。

目名農場は、明治 41 年 2 月、最後の 400 町歩余りの成墾をもって、全農場の無償付与を受けた。この農場完成を受けて平田敬信の碑が建立されたのが同年 11 月 28 日で、この年、北垣国道が買受けて「北垣農場」となった。碑の建立の時には、農場主名は、河瀬秀治他なので、実際の売買はこの後なのだろうが、京都にいた北垣から小樽の寺田省帰への明治 40 年 11 月 8 日付書簡がある（「北垣国道と小



影撮場農名目郡谷磯

「平田翁頌功碑記念」より転載

樽」註本間勇児）。それによると、目名農場買入れの件についての詳細が書かれている。目名農場地代の手付金として明後二日に金 2 万円を渡し、残りの 6 万 3 千円は、地所の付与が許可され目名農場組合の所有権が確定した後に払う、つまり 882 町余の農地の売買代金が、合計 8 万 3 千円となっている（町史では、6 万 6 千余円となっている）。さらに明治 40 年 11 月 25 日付の北垣から寺田への書簡では、平田からの目名農場売買契約が整った旨の書を受け取り、このように円満に売買が成立したことは、平田が全力を尽くして労苦してきた結果であり、それを大いに喜び祝うものであると書き送っている。つまり無償付与前に農場の売買が成立して、引き続き平田敬信が農場管理を行うことも決まっていたようだ。そしてそれだけではない。明治 40 年 11 月 26 日付北垣から寺田宛の書簡で、平田の碑を建立する件について、寺院か神社の境内に建てるべきだが、適当な場所がないので朱線で囲んだ図面に示した 100 坪ばかりの場所に碑を設置することを平田に指示するようにと書いている。かくして平田敬信は、自分の碑を北垣の指示通り建てることになり、北垣国道と平田敬信は、農場所有者と管理人になった。

「北海道農場調査」（大正 2 年）によると、北垣農場は、明治 42 年 3 月牧場目的でチリベツ未開地 369 町歩余を貸し付け、明治 44 年 11 月全地付与された。総面積 1212 町 9 反 9 畝 2 歩に拡大して、小作 120 戸が主要農作物（大豆、小豆、豌豆、そば、裸麦・小麦）を産出する大農場となった。

明治 43 年には三笠奥で種馬 1 頭、牝馬 10 頭を放牧し産馬の改良をはじめ、翌年には相生、賀老、三笠で水稻試験田を行うなど新たな経営に努め、それはその後大正 3 年には反収 4

俵、翌年には相生 1 で造田 10 町歩という成果につながっていくことになる。明治 44 年北垣農場全地付与され、同年小樽「北辰社」に売却され、北垣農場は北辰社農場となった。「北辰社」は、北垣国道と榎本武揚が設立した会社だが、明治 41 年榎本武揚が死亡し、子息武憲が継いでいた。平田は、北辰社農場と改称された後も、続けて管理人を務めた。

明治 45 年の概況によると、目名駅から鉄道で小樽にナラ、セン、タモの角材を中心とした木材 1 万 2 千石を搬出し、養蚕が盛んで、野桑が豊富なだけでなく桑園を有する農家も少なくない。年々 60~70 石の良繭を産出している。

一方、目名駅まで約 1 里のところにある平田自身の農場は、明治 41 年 5 月神鞭知常（明治 38 年死亡）の長男神鞭常孝の所有畑 56 町 3 畝 16 歩を購入し、総面積は 94 町 7 畝 4 歩、小作 19 戸の農場となった。

目名農場と平田農場を経営する傍ら、平田は、明治 35 年から総代人として行政にかかわり、昆布郵便局局長（明治 37 年 12 月～明治 42 年 5 月）を務めた。1・2 級町村制が実施された明治 42 年からは、村会議員としてかかわり、大正 4 年には佐藤栄右衛門が衆議院議員総選挙に出馬のため辞職した後の補選で第 5 期道議会議員となった。在任期間は、大正 4 年 9 月 8 日～大正

5 年 8 月 9 日と短い任期を満了した。さらに平田は、大正 6 年には北辰社農場の監督を寺田省帰と交替し農場から手を引いた。前年北垣が 1 月に死亡していた。寺田省帰は、農場を分割して、一部は個人、一部は団体に売却し、大正 7 年には農場は解散した。名駒に転居していた平田は、このころすでに何かの病を得ていたのか、大正 7 年 6 月 9 日（日曜日）の「北海タイムス」に平田の死亡広告が載った。



影撮場農一第氏田平部谷磯

「平田翁頌功碑記念」より転載

平田敬信儀

予テ 病氣療養中ノ処薬石効ナク 昨七日午前七時五十分死去仕候 葬儀八来ル
十一日午後一時 磯谷郡南尻別村字目名 出棺 瑞苗寺ニ於テ執行可仕候 此段
生前辱知諸君ニ謹告候也

六月八日

妻 平田文

男 平田保太郎

平田信成

葬儀が行われた瑞苗寺は、奇しくも前任者川村政直が明治 32 年に、信徒総代として新寺創立願いを出して、許可され、建立された寺であった。

平田敬信は、明治3年に家督を相続した。家業を創設して家の存続と維持、できれば発展をはかることが彼に課された課題であった。学問をすることから始め、それを生かして、教師や官吏になるのが、当時の普通の士族の道であったので、敬信も、訓導になり、京都府の官吏にもなった。ただ日本の国自体も何もかも先が見えない中で、欧米に追い付き追い越す道を模索していた。自由民権運動、新しい産業、工業の出現、など国中があわただしく変わっていく。平田敬信は、自分の進むべき道を、その時々、同郷の偉大な先輩人士に仰いだのではないだろうか。あたかも、武士が藩主に付き従うように、故郷にとどまらず中央にも進出して活躍する巨大な星に仕えることに、自分を生かす道、家を発展させる道を見つけたのだろう。彼が、幸運だったのは、彼らから機会を与えられ、ある程度認められ、そのことによって家を盛り立てていけたことだった。平田敬信は、根っからの武士だったのかもしれない。

完